

天狗党への認識をめぐる過去と現在 —自治体史の記述と史料から—

塚田 理紗子

「天狗党」とは、幕末に水戸藩で誕生した「天狗派」の人びとを中心とする尊王攘夷過激派集団の総称である。天狗党の起こした「天狗党の乱」については一連の事実や流れはすでに解明されており、天狗党への一般的な評価も存在する。その評価は、金銭や食料を奪っていく人たちであるという否定的なものである。

しかしながら、天狗党と直接関係した地域での現代の人びとの評価は十分に検討されていない。よって本研究では、天狗党に対する現代の人びとの意識へも着目し、天狗党への認識を明らかにすることにより、地域の視点から歴史認識の再検討を行うことを目的とする。研究対象は、筑波山と太平山周辺の市町村で発行された自治体史 58 点と、自治体史に伴う史料集 25 点である。史料集では、天狗党を表す呼称に着目して当時の人びとの天狗党への意識を明らかにした。自治体史では、天狗党と自治体史を発行した市町村(以下、地元)に関する記述の量と内容の分析から、現代の人びとの天狗党への意識を明らかにした。

天狗党の呼称の分析から、現在私たちが用いている「天狗」という表現が当時の人びとにとっては一般的でなかったことや、幕府側と筑波山・太平山周辺の人びと(以下、地元の人びと)との天狗党への意識には違いがあったことが分かった。天狗党が筑波山周辺で活動していた頃の呼称からは、天狗党への否定的な感情は感じられなかった。ところが、水戸・那珂湊方面で幕府側と天狗党との戦闘が本格化してくると、幕府関係者や役人が天狗党に対し「賊」という言葉を用いるようになった。これに対し、地元の人びとは「浮浪」「浪人」という言葉を含む呼称を一貫して多く用いている。幕府の天狗党への「賊」という意識は、地元の人びとには広まらなかったといえる。さらに、幕府が「賊」を含む呼称を用い始めてからも、天狗党に対し「勇士」という表現を用いている地元の人びとがいた。通説として否定的にとらえられ、当時幕府も「賊」とみなしていた天狗党に対して、当時地元の人々は「勇士」という良い印象さえ持っていたことが明らかになった。

次に、自治体史本文の分析を行った。天狗党と地元に関する記述の文字数から、茨城県内の対象自治体史においては、天狗党との関わりが多かった筑波山の東側や西側の地域で記述が多くなっていた。しかし、天狗党との関わりがあったにもかかわらず、自治体史本文に記述がみられない市町村もあった。これは、自治体史制作者の「天狗党の乱」への関心の薄さ、あるいは記述するに足る史料の不足を表しているといえる。栃木県内の対象自治体史の本文の記述量に、地理的な分布の差はみられなかった。記述内容では、天狗党に対し否定的な記述が多い一方で、天狗党への参加者に肯定的な記述や、天狗党の行動に理解を示す記述もみられた。

以上より、通説にある天狗党への認識は、全ての時期や地域に必ずしも当てはまるものではないといえる。

(指導教員 白井哲哉)